

再任用・再雇用職員・非常勤教員部ニュース

No. 306

2018.1.17

東京都立学校教職員組合（東京教組）

再任用・再雇用職員・非常勤教員部

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2 2F

TEL. 03-5276-1311 FAX. 03-5276-1312

明けましておめでとうございます。

「支え合い」を大切にしながら、 組合運動を進めましょう！



2018年がスタートしました。年頭から、朝鮮半島をめぐる「危機を煽る」安倍政権に追随するだけのマスコミ報道には辟易ですが、沖縄では、米軍ヘリの「部品脱落」や「不時着」が相次ぎ、市民生活が脅かされています。安倍首相は、「憲法尊重擁護義務」を無視して、今年中の「改憲発議」を公言してはばかりず、平和と民主主義を守る闘いは、ぎりぎりの段階に来ています。振り返って学校現場で続く慢性的な「長時間労働」の現状とその要因について、やっと社会が認識するようになりました。年末には、文科省が「緊急対策」を発表するなど、かつてなかった動きです。私たちの培ってきた運動の意義を改めて確認するとともに、知恵と力を結集し、運動を前進させていきましょう。今年もよろしくお祈りします。

新学習指導要領の実施を延期すべきだ！

18年度予算案が閣議決定。教員定数改善は、文科省要求の5割を割り込む！

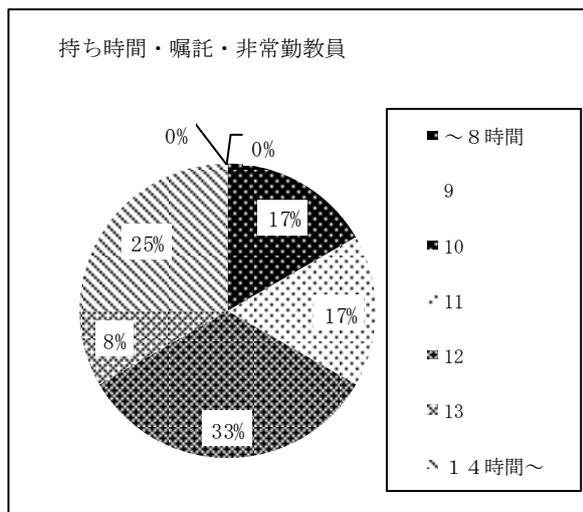
昨年12月22日、政府は「2018年度予算案」を閣議決定しました。自然減を上回る教員定数削減を主張する財務省の強硬な姿勢により、文科省が要求した9年間の「教職員定数改善計画（22755人）」の初年度分（3415人）は、実現しませんでした。特に、来年度から、移行措置期間になる「新学習指導要領」への対応として文科省が求めていた、小学校専科指導の充実分の加配定数の改善は、2200人の要求に対して1000人分しか認められていません。要求の45%に過ぎないのです。これでは、極めて限られた学校にしか（超大規模校か？）「英語専科」が配置されないこととなります。人的な裏付けがないのに、小学校の5・6年生について、現行の「外国語活動」を「教科としての英語」にするなど、まさに「絵に描いた餅」ではありませんか！

文科省は、4日後の26日に「学校における働き方改革に関する緊急対策について」を発

表しましたが、教員定数も増やさず授業時数を増やそうとしている中で、「働き方改革」など、できる道理がありません。中学校については、長時間労働の要因となっている「部活動」について、今後対策が進んでいけば、一定の効果が出ると思われていますが、小学校については、「絶望的」と言わざるを得ません。現在、来年度の教育課程の編成について、各地教委からの方針が伝えられている段階ですが、文科省が来年度5・6年生の英語を、15時間増やすとしているのに対し、これを上回る時数増を求めている地教委が少なくありません。現状の働き方＝働かせ方が「違法状態」であるのにも関わらず、国基準に上乗せして時数増を求めることなど、絶対に許されません。来年度からは、道徳の教科化が実施され、それに伴って道徳についても所見を書く事になります。もちろん、学期ごとではなく、年間を通しての所見にするという自治体もあるとのことですが、これ一つとっても、教員の負担が増すことは明らかです。さらに、年間指導計画の改訂、評価基準と評価規準の改訂などなど、指導要領の改訂に合わせて、学校に求められる作業は、膨大なものになります。日々の授業を、大幅なサービス残業でやっとなしているところに、このような負担増は、教員の健康にとって、致命的な打撃を与えることは必至でしょう。定数改善ができなかった以上、文科省は、新学習指導要領の実施の延期を、決断すべきではないでしょうか。また、これまで、ありとあらゆる「要求」を受け入れてきた学校現場が、「もはや無理！できない！」の声を上げることも必要ではないでしょうか。

2017年度 再任用・再雇用職員・非常勤教員部 アンケート結果

1. 持ち時間数に関して

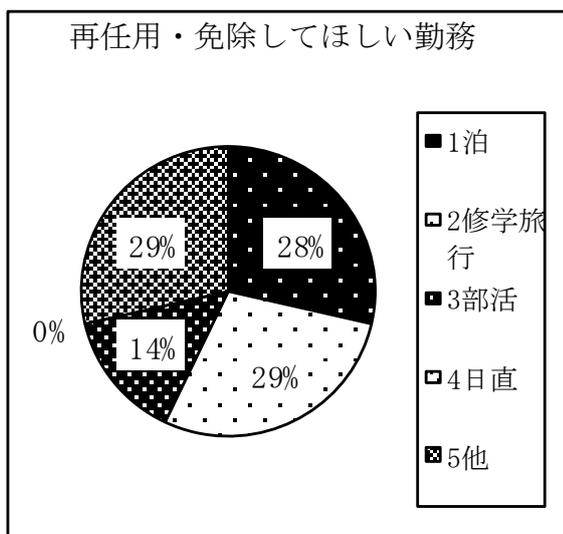


非常勤教員・嘱託員の持ち時間数は、10～12時間で約70%になるが、14時間以上が25%になっている。

小学校では、担任が欠ける時を想定して持ち時間の表記がないが、通常時に多くの持ち時数は、中学校の規定を超える。また、再任用短時間の持ち時間や給与とのバランスを欠くものとなっている。

小学校での持ち時間数が、中学校の規定11時間を超える時間数となっている。

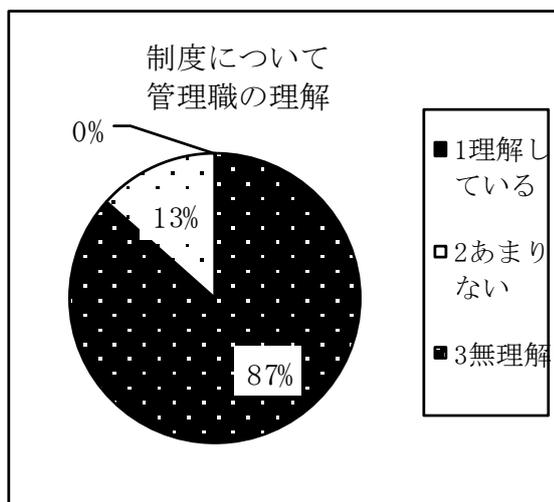
2. 勤務内容に関して



再任用教員の勤務としては、泊を伴う行事を免除してほしいという意見が多い。現職教員でも泊を伴う引率は体力を必要とするが、再任用教員にとっては、なおさらである。

泊を伴う引率は、遠慮したい

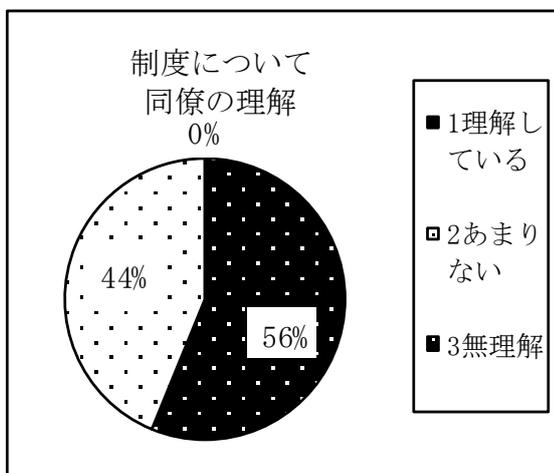
3. 管理職の理解度



管理職が再任用、非常勤教員に対して「理解がある」との回答が多かったが、「あまり理解がない」との回答のなかには、再任用制度の中でも授業の持ち時間勤務条件についての理解が不十分な様子が訴えがある。

管理職に、更なる勤務条件への理解を求めたい

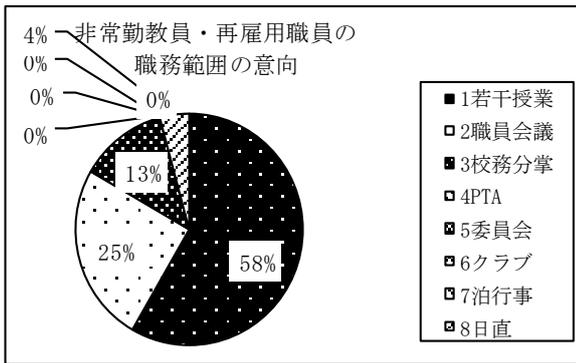
4. 同僚の理解度



同僚職員が「再任用、非常勤教員に対して理解がある」半数をこえているが、「あまり理解がない」との回答も多かった。
職場の多忙化で、再任用・非常勤教員に多様な仕事を現職同様に依頼する傾向が回答に表れている。制度については、内容にまで意識がいかない傾向がある。

職場の多忙化が、同僚からの理解の妨げとなるようだ

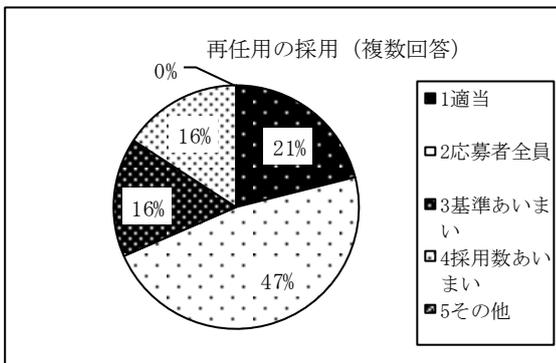
5. 職務の範囲



非常勤教員・再雇用職員の職務範囲についての意向は若干の授業が半数をこえ、職員会議が4分の1となった。(複数回答)

職員会議に関する職務が増加

6. 採用について



再任用の採用については、希望者全員を採用する意見が半数近くあり、採用基準や数が曖昧との意見もあった。年金の支給年齢の引き上げにより再任用希望者の増加が見込まれる。

採用基準が曖昧と感じている

年金支給年齢引き上げ＝任用希望者増加に

寄稿

韓国フィールドワーク

元部長 城田 純生

11月10日(金)、ソウル金浦空港に向けてJAL91便は羽田を飛び立った。日韓連帯民衆委員会主催の韓国フィールドワークの3泊4日のツアーの始まりである。総勢18人のメンバーだが現地集合組もいて今回91便に乗るのは10人だった。私にとっては初めての海外旅行の始まりである。

金浦空港からは地下鉄でソウル駅に向かう。地下鉄内で驚いたのは、若者達が私たち年輩者に対して次々と席を譲るというできごとだ。日本では滅多にないことである。儒教の教えが色濃く残っている文化的な違いを感じた。ソウル駅ではKTX(韓国の新幹線)に乗るために時間調整をする。ソウル駅の外に出て駅周辺の様子を見て回る。駅のそばに、横断幕を張り椅子を並べて何かを訴える人々がいた。近くまで行って様子を見たがハングルが読めない私には何が何だかわからない。後で聞いてみると、「朴槿恵を早く釈放しろ」と訴える右派の人々だということが分かった。

ソウル 駅



KTX に乗り込むがいつ切符を買ったのだろうか？と思うくらい切符とは無縁の乗車をする。これも韓国式なのか？

KTX は韓国の新幹線だそうだがソウルを出たころはこれが新幹線？というような速度であった。だが、在来線のような踏切などが見当たらないので、そのうちに速度が出るのだろうと想像していた。車窓から見える景色で印象に残るのは、高層の建物である。細長い超高層20～30階くらいの建物が林立している。韓国は地震が少ないのでこんなことができるということだった。

3時間弱で馬山に到着。駅には韓国サンケン労組のキム・ウニョンさんたちが出迎えてくれた。久しぶりの再会を喜んだ。駅から少し歩いたところのアリランホテルの部屋に荷物を置き、再びホテル玄関前に集合した。

サンケン電気労組の方と再会



そもそも今回韓国を訪れる様になったのは韓国サンケン電気労組とのつながりがある。韓国サンケン電気の親会社は日本にあり、韓国サンケン電気は日本の会社が100%出資している子会社である。昨年秋、韓国サンケン電気は工場を閉鎖し従業員を全員解雇するという暴挙に出た。この突然の事態は、韓国の労働法に照らしても違法なことであった。ところが、会社側は組合との話し合いを一切せず、しかも当事者能力

も全くないに等しかった。業を煮やした韓国サンケン労組は日本のサンケン電気と直接交渉を持つため、日本に遠征し闘争を開始した。毎朝の本社正門前での抗議、志木駅前での街宣等を行った。その中心となったのがキム・ウニョンさんという女性である。

私も日本のサンケン電気の社長宅が私の自宅のご町内にある関係で、何度か社長宅抗議行動に参加した。キム・ウニョンさんは日本に遠征するにあたって、この闘争に勝利するまでは韓国に帰らない、そして、自らの髪を剃髪するという固い決意で来日し、闘争を続けたのである。彼女らの必死の闘いの結果今年6月に、全面勝利を迎えることができた。私もささやかな支援ではあったが、キム・ウニョンさんとの再会ができるというのでこのツアーに参加した。

サンケン労組の方々の車に分乗して馬山自由貿易地域に進出した工業団地内の見学をする。三菱やソニーや日本の大企業が進出したそうだが、今はそのうちの多くが撤退しているようだ。どうして？と聞くと当初は労働運動も禁止され人件費も低く抑えられていたが、労働運動が活発になり、それにつれて人件費も高騰してきたのでうま味がなくなり、次々と撤退していったようだ。工業団地を一通り見て回ったあと、最後に韓国サンケン電気に行く。サンケン労組の休憩室でジュースと菓子での歓迎会に参加する。休憩室の外は会社の屋上になっていた。外は既に陽は沈み辺りは暗くなっていたが、屋上からは馬山の港湾周辺に立ち並ぶ工場群や夜景が綺麗だった。 **次号に続く**

I ICAN 事務局長の日本訪問と

平和について発言する吉永小百合さん

2017年ノーベル平和賞を受賞した ICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）のベアトリス・フィン事務局長＝スウェーデン出身＝が現在来日中。長崎や広島を訪れ、被爆者や若者たちとの交流を通し、「大きな変革は常に抵抗をともなうものだが、私たちは歴史の正しい側にいる。長い視点を持つことで前向きになれる。」と未来を語ったことが報道されている。

この来日に合わせ、安倍首相に面会を申し込んでいたそうですが、「日程の都合」とのこと、面談を断られていたことが明らかになりました。朝日新聞によると「日本政府は(核保有国と非保有国の)『橋渡し』を担いたいと言っているので話し合いたかった。大変失望している。次の機会に期待したい。」と「大変失望」の小見出しをつけ、フィン氏の気持ちを伝えています。

ICAN を無視した安倍首相がいま何をしているかということ、わざわざバルト3国まで出かけて行き、エストニアの首都・タリンや、リトアニアの首都・ヴィリニウスについて「タリンもヴィリニウスも北朝鮮の弾道ミサイルの射程圏内」「欧州全体の危機」などと、北朝鮮の脅威を煽ってまわっているのです。南北会談が実現し、北の「平昌五輪」参加をきっかけに「対話」に向け世界各国が協調しているなか、いまだ「対話より圧力」路線を崩そうとしていません。

安倍首相と言えば、カズオ・イシグロ氏のノーベル文学賞受賞には即座にお祝いコメントを出した一方、ICAN のノーベル平和賞受賞には現在にいたるまで一切の祝福コメントを出していないなど、一貫して冷淡な態度をとり続けています。今回の「面会断り」で、核廃絶に後ろ向きな安倍首相の姿勢が、またしても世界中に明らかになったと言えるでしょう。

こうした平和への声は、日本の吉永小百合さんからも上がっています。

2018年1月6日付朝日新聞のインタビューに応えた吉永さんは、「東アジアは大変な状況ですけれど、それでもみんなでテーブルについて話さなければならない。そうさせるのは私たち一人一人です」と話されました。さらに、ICAN について問われた吉永さんは、「今、核兵器の禁止をそれぞれの国の人たちが考え、意見を出し合って大きな流れにしたのは素晴らしい。次は、この国で生きている一人一人が声を出していくことが大事だと思います」とも語っています。

吉永さんといえば、各地で原爆詩の朗読会を開き、核廃絶を訴えてきたことでもよく知られています。最近の映画でも長崎の原爆で息子を失った母を演じたり、朗読劇の公演など、幅広い女優として仕事に加え、きめ細かな平和への関わりをされていることを知っています。都内にある小さな「平和原爆資料館」に貴重な支援をして下さっています。

吉永さんのような確固としたキャリアをもっている人が、社会的なメッセージを積極的に発信し続けてくれることで、次の吉永さん世代からもそれに続く流れが生まれることを、心から願いたいと思います。